

〔伊呂波字類抄幾天象〕二月〇キサラキ

〔八雲御抄三節〕二月きさらぎ

〔下學集上節〕夾鐘クワシヨウ二月キサラキ衣更著ウサキ猶ニ殿ニ故ニ衣更著也クワニ華朝クワニ故ニ云ニ華朝ニ待ビ美景ケイニ也ニ二月ケイ惠風ケイ也ニ星鳥セイニ二月ケイ

〔二中歷五時〕月倭名ニ二月俗説云、正月和暖、此月天氣還寒、更著冬衣、故稱此月爲衣更著也、今所謂キサラギハ、是キヌサラニキツキノ略也、

〔輿義抄上末〕二月異名二月きさらぎさむくてさらにきぬをきれば、きぬさらぎといふをあやまれるなり、

〔東雅一文〕キサラギ、ヤヨヒなどいふごときも、ふるく釋せし所のごときは、其釋なからんには、空

さへかへりぬる月也とも、草木のをひそふる月也とも、玄かるべしとも覺えず、古語にキサとも

キサケとも、キサキとも、キサイともいひし事どもあれば、其釋せし所の義とは同じからず、

〔語意考〕二月は伎キ佐良サラ藝月ギと云は、久ク佐サ伎キ波里ハリ月也、草木の芽を張出すは二月也、其久ク佐サ伎キの三言

の約めは伎キなれば、伎キとのみもいふべく、又は草は略くともすべし、佐良サラと波里ハリは韻通へり、

〔倭訓栞前編七〕きさらぎ 二月をいふ、氣更に來るの義、陽氣の發達する時也、

〔古今要覽時令〕きさらぎ 二月きさらぎとは二月をいふ、いとふるき和訓なり、日本書紀に神武

紀出たり、略 〇中 二月を伎佐良藝月、言は久ク佐サ伎キ波里ハリ月也、草木の芽を張出すは二月也、其久ク佐サ伎キノ

三言の約めは伎キなれば、伎キとのみ云べくも、又は草は略くともすべし、佐良サラと波里ハリは韻通へりと

意語云は、古人未發の考なれども、平田篤胤が、く芽みさら月にて、夫よりいや生とつゞくといへるか

た然るべし、跡部光海翁は、衣更衣陽氣を更にむかふるを云といひ、きさらぎ二月をいふ、氣更に

來るの義、陽氣の發達するときなりと和訓 いひ、又此月玄鳥到と月令にみゆれば、去年の八月に

雁來りしが、また更に來るの意、歟と類聚名 いへり、また二月の異名あまたあるが中に、むめつさ

月と躬恒秘 いひ、雪消月後頼朝臣 梅津月と同 みえたり、後世にいたりて、月々の名目もいとおほ

くなりたり、いはゆる梅見月藏玉 小草生月と同 いふたぐひなり、西土にても、異名さまざまある